View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第65号　2016　119－128

岡山市方言における終助詞「デ」

小　畠　裕　将
（2016年10月６日受理）

The Sentence-Final Particle *de* in the Okayama City Dialect

Hiromasa Kobatake

Abstract: The current study examines the dialect of Okayama city, particularly the sentence-final particle *de*, which is analogous to the Japanese common language sentence-final particle *yo*. A comparison of *de* and *yo* revealed two main findings. First, similar to the Japanese common language, the basic meaning of *de* in the Okayama city dialect is to display mental manipulation and represent a gap in recognition. The particle *de* conveys different meanings based on its intonation: pronouncing *de* with a rising intonation indicates the compulsion of mental operation, while a falling tone indicates the delegation of mental operation. Second, in the Okayama city dialect, *de* can be used in different ways. It can be used to express something that is not apparent to the speaker or to refer to the display of a limited gap in recognition, and it does not require a reaction from the audience.

Key words: Okayama city dialect, Sentence-final particle, Sentence-final intonation
キーワード：岡山市方言，終助詞，文末イントネーション

１．はじめに

岡山市方言には，共通語の終助詞「よ」と意味・用法が類似している (1) のような終助詞「デ」が存在する。しかし，岡山市方言の「デ」は (2) ～ (5) のように命令形・禁止形には接続しない，コピュラを伴わない，他の終助詞と共起しないなど，共通語「よ」とは異なる点も見られる。

(1) アメ　フッテキタデ。
　（雨が降ってきたよ。）
(2) ハヨー　イケ　{* デ／ヨ／ヤ}。
　（早く行けよ。）
(3) オメーワ　イクナ　{* デ／ヨ／ヤ}。
　（おまえは行くなよ。）
(4) タローワ　トモダチ　{* ジャデ／ジャ／デ}。
　（太郎は友達だよ。）
(5) サイキン　アツーナッテ　キタ　{* デナ／ヨナ}。
　（最近暑くなってきたよね。）

岡山県内方言における終助詞「デ」についての先行研究には，美作方言の文末詞について記述した室山（1966），笠岡市真鍋島，真庭郡旧二川村の方言について記述した藤原（1976，1977）などがある。しかし，これらは各地の方言についての総合的な記述であり，「デ」の意味・用法について詳細な検討はなされていない。また，発表時期が古いことや，岡山市とは方言区画が異なる地域の記述であることなどから，現在の岡山市方言とは意味･用法が異なることが予想される。

本稿では，岡山市方言における終助詞「デ」の意味･用法を共通語の終助詞「よ」と対照しながら記述する。また，岡山県外の方言における「デ」について，野間（2011）が大阪方言について記述しているため，これと対照し，岡山市方言の「デ」の特徴を明らかにする。

本稿の記述は岡山市で生育し，調査時も居住する話者（1934年生まれの男性，1936年生まれの女性）への聞き取り調査，及び筆者自身（1991年生まれの男性，0-1歳岡山県井原市→1-18歳岡山市北区→以後県外に居住）の内省にもとづく。

2．共通語「よ」の機能

共通語「よ」の機能について，大曽（1986），益岡（1991）は「ね」と対比させて「よ」は話し手と聞き手の認識や判断が対立する方向にあるとする。また，陳（1987）は聞き手にとって未知の情報であるか否かによって「よ」と「ね」が使い分けられることを主張する。しかし，「よ」と「ね」が対立したものであるとすると，「よね」という「よ」と「ね」が共起した形式を説明できない。

これに対し，白川（1992）は，述べ立ての文を対象とした分析から，「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを，ことさら表明する」ことであるとし，「聞き手めあて」の発話であることを表示することに終助詞「よ」の機能があるとする。

一方，蓮沼（1996）はこうした話し手の伝達態度からは「よ」の用法の全体像が十分把握しきれないとし，「「よ」は，文脈に認識上の何らかのギャップの存在を表示するとともに，そうした状況における認識能力の発動，あるいは認識形成に対する指令を表す」という心的操作の表示から「よ」の機能を説明する。蓮沼はさらに「よ」のとる音調による機能の相違を以下のように示す。

また井上（1997）はイントネーションによる「よ」の機能の異なりを以下のように指摘している。

・上昇調の「Pよ↑」
「話し手と聞き手を取り巻いている状況は，Pということが真になるという，そういう状況である」ということを聞き手に示して，「このような状況の中でどうするか」という問題をなげかける。

・下降調の「Pよ↓」
話し手と聞き手をとりまいている状況を「「Pということが真になるという，そういう状況である」という線でとらえなおすよう強制する。

井上が示すそれぞれの「よ」の機能も心的操作の表示にあたるものであり，「よ」がもたらす心的操作がイントネーションによって異なることが示唆される。

本稿でも蓮沼の定義に従い，「よ」の基本的な機能を心的操作の表示と考える。また井上の指摘から，イントネーションによる機能を上昇調では心的操作を強制する，下降調ではなげかけるものととらえておく。

3．岡山市方言「デ」の生起環境

岡山市方言の「デ」には上昇調の「デ」（以下，「デ↑」）と下降調の「デ」（以下，「デ↓」）があり，使用可能な文タイプが異なる。平叙文，勧誘文では(6)(7)のようにデ↑・デ↓ともに使用できる。なお，岡山市方言では「未然形＋む」に由来する「フロー」「カコー」「ミヨー」など-(j)ooの形が意志，推量，勧誘を表すことができるが，推量，意志を表す場合には「デ」は接続できない。また共通語の「よ」とは異なり，(8)(9)のように命令形や禁止形には接続できない。

疑問文はデ↓のみ使用できるが，(10)のような真偽疑問文では使用できず，(11)のような疑問詞疑問文に限り使用可能である。ただし，疑問詞疑問文における「デ」の使用は女性的であり，男性であれば「ナ」を使用する方が一般的である。

(6) アメ　フッテキタ　{デ↑／デ↓／ヨ}。
（雨が降ってきたよ。）
(7) ソロソロ　イコー　{デ↑／デ↓／ヨ／ヤ／φ}。
（そろそろ行こうよ。）
(8) ハヨー　イケ　{*デ↑／*デ↓／ヨ／ヤ／φ}。
（早く行けよ。）
(9) オメーワ　イクナ　{*デ↑／*デ↓／ヨ／ヤ／φ}。
（お前は行くなよ。）
(10) ホンマニ　イクン　{*デ↓／*デ↑／カ／φ}　？
（本当に行くのか？）
(11) ダレガ　イクン　{デー↓／*デー↑／ナー／φ}　？
（誰が行くんだよ？）

また，「デ」には認識のモダリティによる制限がある。断定のほか，(12)(13)のように「はず」「らしい」「（する）そうだ」「（し）そう」など，テンスの分化を許すものには接続できる。一方，テンスの分化を許さない推量を表すモダリティ形式とは共起せず，(14)(15)のように共通語の「だろう」にあたる「ジャロー」や推量を表す動詞の-(j)oo形，否定推量を表す「マー」には接続できない。ただし，先述したように勧誘を表す-(j)oo形であれば「デ」が現れうる。否定の場合も同様で，否定勧誘を表す「マー」には接続できる。

(12) キョー　アメ　フル　{ハズ／ラシー／ソー}
{デ↓／デ↑}。
（今日は雨が降る{はずだ／らしい／そうだ}よ。）
(13) イマニモ　アメ　フリソー　{デ↓／デ↑}。
（今にも雨が降りそうだよ。）
(14) タブン　キョー　アメ　{フルジャロー／フロー}
{*デ↓／*デ↑／φ}。
（多分今日はあめが降るだろうよ。）
(15) タブン　アメ　フルマー　{*デ↓／*デ↑／φ}。
（多分雨は降らないだろうよ。）

4．「デ」の用法

4．1．平叙文における「デ」

平叙文においてはデ↓・デ↑ともに (16) ～ (19) のように動詞述語文，形容詞述語文，形容動詞述語文，名詞述語文全てで使用可能である。岡山市方言の形容動詞は共通語と同様の活用のほか,「静かだろう」が「シズカナカロー」となるように，連体形が語幹化する活用がある。このような連体形が語幹化した場合,「デ」は語幹に直接接続する。名詞（形容動詞）述語に接続する場合は, 共通語「よ」とは異なり, コピュラ「ジャ」を介さず直接接続する。

(16) オイ　ソロソロ　バス　クル｛デ↑／デ↓｝。
（おい，そろそろバスが来るよ。）
(17) イマ　ハワイワ　アチー｛デ↑／デ↓｝。
（今ハワイは暑いよ。）
(18) タローノ　クミャー　デーレー　シズカ
｛* ジャ／ナ／φ｝｛デ↑／デ↓｝。
（太郎の学級はとても静かだよ。）
(19) アシター　アメ｛* ジャ／φ｝｛デ↑／デ↓｝。
（明日は雨だよ。）

岡山市方言における「デ」は，基本的に聞き手が十分に認識していない情報を認識させる場合に用いられる。その性質上，聞き手に行為の実行を促すことが多い。(16) では「そろそろバスが来る」という情報を提示し，聞き手にバスに乗る準備を促している。「デ」の音調は当該情報を聞き手が認識しているか否かで異なる。デ↑は聞き手が当該情報を知らない状況において，それを認識させ，注意喚起をする。それに対し，デ↓は聞き手が当該情報を認識しているにも関わらず，それに沿った行動をしていない状況において，改めてその事実を認識させ，行動を促す。また，デ↓は認識している情報に沿った行動をしていない状況で使用される場合，それに対する不満や非難を表示し，望ましい行動を強く要求する。

井上（1997）は共通語において「P よ↓」が「異議申し立て」のニュアンスを伴うことが多い理由として,「「聞き手は事柄 P を知らないだけでなく，自分がいるこの状況がどのような状況かを正しく理解していない」という含みが生じやすいからである」としている。デ↓に非難などの否定的評価が伴いやすい理由は，共通語の「よ↓」と同様，聞き手が自身の置かれた状況を十分に理解していないと話し手が判断しているためであると考えられる。

「デ」による行為の実行の要求やデ↓による否定的評価の表示は必須ではない。(20) も聞き手にとって未知である情報を提示しているが, デ↑では「行くよ（だとしたら呼んでくれる？）。」というように心的操作を聞き手になげかける。それに対し，デ↓は「行く。」という話し手の判断を宣言し，聞き手にその認識をせまる。(20) のデ↑，デ↓ともに話し手に自分が行くことを認識させる点では共通している。その上で，デ↑はその情報を加味した上で相手に判断をすることを求め，デ↓は話し手の判断を認識させること自体が目的となっている。この点も共通語の「よ」と共通していると言える。(20) のような例がみられることから，行為の実行の要求や否定的評価の表示はデ↓に必須のものではなく，デ↓が二次的にもつ語用論的な効果によるものと考えられる。

(20) A：ウチノ　シキ　ヨンダラ　クル？
（私の結婚式，呼んだら来る？）
B：モチロン　イク｛デ↑／デ↓｝。
（もちろん行くよ。）

また，デ↓によって示される話し手の否定的評価の対象は聞き手に限らず，(21) のように話し手が置かれている状況も対象にとりうる。話し手が望ましいと判断する状況が，話し手が置かれている状況と乖離しているという点においては聞き手に対する否定的評価を伴うデ↓と共通する。この用法では，聞き手に心的操作をなげかけるデ↑は使用できない。(21) のように，聞き手の認識は話し手の認識と近似している。デ↑は暑すぎるということから推論を行う余地がないために使用できないと考えられる。それに対し，デ↓は話し手が「暑すぎる」と思っているという事実の認識を強制するものであるため，聞き手の認識に関わらず使用できる。

(21) A：キョー　デーレー　アチーナ。
（今日はとても暑いね。）
B：オー　チカゴロノ　ナツァー　アツスギル
｛* デ↑／デ↓／ワ｝。
（うん，近ごろの夏は暑すぎるよ。）

また, 当該情報を聞き手が十分認識していなくても，デ↑のみ使用でき，デ↓が使用できない場合がある。具体的には (22) のような問いかけに対する応答や, (23) のような話し手に利益のある行為指示について補足情報を提示する際にはデ↓を使用することができない。

(22) A：イマナンジ？（今何時？）
　　B：ニジ｛デ↑／*デ↓／φ｝。（二時だよ。）
(23) ウチノ　ダンタイ　｛ハイッテクレン？／ハイレヤ。｝　タローモ　オル｛デ↑／*デ↓／ヨ｝。（うちの団体に｛入ってくれない？／入れよ。｝太郎もいるよ。）

問いかけに対する応答でデ↓を使用することができないのは，「当該情報を自身が認識していないことを聞き手が認識している」ためであると考えられる。デ↓は認識の変更をせまる表現である。自身が認識していないと分かっている聞き手に対しては，そのような強い働きかけは不要である。むしろ必要以上の働きかけによって，先述したような否定的評価を表示していると解釈されるおそれもあるため，それを避けるためにデ↓が用いられないのだろう。(20) では問いかけに対する応答で使用しているが，この例では話し手が「もちろん」という表現を使用しているように，話し手は「聞き手が当該情報を認識しているはずである」と判断している。これは「当該情報を自身が認識していないことを聞き手が認識している」という条件にはそぐわないものである。このような場合には，問いかけに対する応答であってもデ↓が現れうる。

話し手に利益のある行為指示の補足情報を提示する際にはデ↓が使用できない。デ↑には話し手が提示する情報から聞き手に推論・判断させる機能があるが，デ↓は心的操作を強制するため，聞き手に推論させる余地がない。(24) のように聞き手に利益のある行為指示の補足情報を提示する場合にデ↓が使用できるのは，話し手が当該行動を行うべきであると考えているため，話し手にとって，聞き手が推論する必要がないためである。しかし，話し手に利益のある行為指示の場合には，聞き手にその行為を行うか否か選択の余地がある。そのような場合に心的操作を強制することは待遇的配慮に欠けるものであるため，デ↓の使用が許されないと考えられる。

(24) コレ　クッテミ。　デーレー　ウメー｛デ↑／デ↓｝。（これを食べてみて。とてもおいしいよ。）

４．１．１．平叙文の「のだ」文における「デ」

平叙文の「のだ」文では，「デ」は準体助詞「の」に相当する「ン」にコピュラを伴わず直接接続し，「～ンデ」の形でデ↑・デ↓ともに現れる。野田（1997）は「のだ」をスコープの「のだ」とムードの「のだ」に区別し，対人的／対事的，関連づけ／非関係づけの観点からムードの「のだ」をさらに4つに分類する。これらの分類のうち，「デ」が使用できるのは主に関係づけの対人的「のだ」である。非関係づけの対人的「のだ」についても，命令を伴う場合であれば使用できる。(25) のように，対事的な把握を表す「のだ」では使用できない。また，関係づけの対人的「のだ」での使用も制限されたものである。(26) のようにただ事情を説明するような場合には使用できない。

(25) ア　アシタ　ガッコー　ヤスミジャッタン｛*デ↓／*デ↑／ジャ｝。（あ，明日学校休みだったんだ。）
(26) A：ナンデ　チコクシタン？（なぜ遅刻したの？）
　　B：デンシャガ　オクレタン｛*デ↑／*デ↓／ヨ｝。（電車が遅れたんだよ。）

平叙文の「のだ」文において，デ↑・デ↓ともに使用できるのは，(27) のような，話し手が提示する情報が聞き手にとって既知であるにも関わらず，それに適した行動をとっていない場合である。この「デ」は命令を伴う関係づけの対人的「のだ」文に現れる。ただし，先述したように「デ」は音調と結びついて行為を促す意味を担うため，後文脈につづく命令表現は必須ではない。また文脈の性質上，この「デ」は否定的評価を伴う場合が多い。

(27)（任された仕事を聞き手がしていなかったのを見て）オメーガ　ヤル　ユータン｛デ↑／デ↓｝。チャント　ヤレーヤ。（お前がやると言ったんだ。ちゃんとやれよ。）

野田（1997）は関係づけの対人的「のだ」を「聞き手は認識していないが話し手は認識している既定の事態Ｑを，状況や先行文脈Ｐの事情や意味として提示し，それを聞き手に認識させようとする話し手の心的態度を表す」とする。ここでの「デ」も聞き手に命令する事情を認識させることで命令を受け入れさせようとするものであり，「のだ」文の機能に沿うものである。デ↑は聞き手に事態から推論させる余地を与えるが，デ↓は事態が既定であることを強調し，強く認識の変更をせまる。その結果，デ↑よりもデ↓の方が話し手の判断にそぐう行動を強く要求する。

また，(28) のように聞き手にとって未知であると話し手が想定している情報を提示する場合，デ↑は使用できるが，デ↓は用いることができない。このデ↑は関係づけの対人的「のだ」に現れ，(29)(30) のように情報を提示し，聞き手に驚きをもってとらえさせるた

めに用いられる場合が多い。先に示した(26)のような単純な事情の説明では「デ」が使用できないが，(30)のようにデ↑の後に強調される情報が示される場合，デ↑が使用できる。このようなデ↑は逆接表現，あるいはデ↑が示す情報に対する話し手の判断が伴う。

これらのデ↑は事態が既定であることを強調するのが目的ではなく，デが示す事態から想定される事態とその後に示す情報の間にあるギャップを強調することに主眼が置かれている。デ↓を使用することができないのはデ↓は心的操作を強制するために推論の余地がなく，このようなギャップを表せないためであると考えられる。

(28) A：ナンデ　カサ　モッテキトン？
（なぜ傘を持って来ているの？）
B：シランノ？　キョー　アメフルン｛デ↑／*デ↓｝？　（知らないの？今日雨が降るんだよ？）

(29) A：タロー　タオレタ　ユーンワ　ホンマカ？
（太郎が倒れたと言うのは本当か？）
B：オレワ　ヤスメ　ユータン｛デ↑／*デ↓／ヨ｝？　ナノニ　タローワ　ヤスモート　センカッタンジャ。
（俺は休めって言ったんだよ？それなのに太郎は休もうとしなかったんだ。）

(30)=(26)' A：ナンデ　チコクシタン？
（なぜ遅刻したの？）
B：デンシャガ　オクレタン｛デ↑／*デ↓／*ヨ｝。ショーガネカロー。
（電車が遅れたんだよ。しょうがないだろう。）

非関係づけの対人的「のだ」においてもデ↓は使用できず，デ↑が用いられる。また，デ↑は基本的に長音化した際には［ショー］ルンデ［ー　のように2拍目で上昇するが，「のだ」文においては高く平らな音調の［ショー］ルン［デー　のような（以下，デー↑）が聞かれる。これらが使用できるのは，(31)のように聞き手に言い聞かせる場合である。ここでは聞き手に対して「おとなしくしている」というその後に実行すべき行動を提示し，それを実行することを言い聞かせている。また，デ↑とデー↑では，聞き手への働きかけの度合いが異なる。(31)では聞き手がおとなしくする可能性が低い場合にはデ↑，おとなしくする可能性が高い場合にはデー↑が使用される。つまり，聞き手が当該情報を十分認識していないと話し手が判断した場合にはデ↑を使用し，当該情報を認識していると話し手が判断した場合にはデー↑を使用すると言える。デ↑は話し手が示す情報から，聞き手に自身が何を（どう）すべきかを推論させる。デー↑はデ↑よりも推論させる機能がやや弱く，聞き手に対して自身が何を（どう）すべきなのかを確認させる程度のものである。

(31) バーチャンチ　イッタラ　オトナシュー　ショールン｛デ↑／デー↑／*デ↓｝。
（お婆さんの家に行ったらおとなしくしているんだよ。）

大曽（1991）は命令の「のだ」に「よ」が付くと必ず上昇イントネーションとなること，行動要求ではなく前もって注意を与える意味になることを指摘している。言い聞かせの「のだ」文における「デ」の機能はこの大曽の指摘と合致する。デ↑は共通語の命令における「のだよ」とイントネーションの付き方，機能ともに共通すると言える。

また，非関係づけの対人的「のだ」におけるデ↑・デー↑は(32)のように提示する情報に自慢の意が含意される場合にも使用される。(33)aのような自慢の意を伴わない情報の提示ではデ↑・デー↑は使用できず，「ヨ」を用いる。

(32) イマカラ　ハワイ　イクン｛デ↑／デー↑／*デ↓／ヨ｝。エカロー？
（今からハワイに行くんだよ。いいだろう？）

(33) a サッキ　タロー　ミタン｛*デ↑／*デー↑／*デ↓／ヨ｝。　（さっき太郎を見たんだよ。）

自慢の意を含意する際，デ↑・デー↑は話し手が示す情報から聞き手に推論させることによって普段とのギャップを強調し，驚きや羨望といった反応を促す。自慢の意が含意されない場合に使用できないのは先述した(26)と同様に，推論させることによる聞き手の反応や行動を話し手が意図できないからであろう。また，デ↓が使用できないのは，「のだ」文におけるデ↓は話し手が示す事態が既定であることを認識することをせまるため，推論の余地がなく，ギャップを強調することによる驚きのような反応を期待できなくなってしまうためであると考えられる。

自慢の意が含意されない場合でも，(33)bのように「のだ」文でない平叙文であれば使用できる。また共通語においても，自慢の意が含意される場合，［み］たん［だー　のように「のだ」が高く平らな音調で現れる。これらのことから，これらは「のだ」文の機能と「デ」の機能が結びついた結果によるものだと言える。

(33)b サッキ　タロー　ミタ｛デ↑／*デー／*デ↓／ヨ｝。イソイドルミタイ　ジャッタ。
（さっき太郎を見たよ。急いでいるみたいだった。）

4．1．2．独話における「デ」

「デ」は，デ↑・デ↓ともに独話においても使用できる。これらは(34)(35)のように「発見」や「決意」を表す際に現れる。「発見」「決意」に共通するのは発話時点で現れた認識について述べることである。森山（1997）は独り言における「ぞ」の意味を「新たに生起した情報内容を意識の中へリアルタイムで書きこんでいく」とする。新たに現れた情報を述べるという性質が共通することから，独話における「デ」は共通語の「ぞ」に近い意味を担うと考えられる。

(34) a ワカッタ｛デ↑／*デ↓｝。コースリャーエーンジャ。（わかったぞ。こうすればいいんだ。）
(34) b ソーカ　ワカッタ｛デ↑／デ↓｝。
（そうか。わかったぞ。）
(35) ヨシ，ヤル｛デ↑／デ↓｝。（よし，やるぞ。）

「発見」を表す場合，(34)aのようにデ↑の後には新たに生起した情報の内容が示される場合が多い。一方，デ↓ではそのような内容が示される場合にはやや不自然となる。(34)bのように生起した情報の内容の補足説明が明示的に現れない場合にはデ↑・デ↓ともに使用できるが，デ↑を用いた場合には明示されるはずであったものが省略されたと解釈できる。デ↓は「わかった」という事態が既定のものとなったことを強調するものであり，デ↑は発見した事態を明示し，「なにを発見したか」とその内容を推論させるものであると言える。

また，(35)のように「決意」を表す独話では，話し手自身を聞き手に想定し，自己に認識すべき情報を提示していると考えられる。認識すべき事態を提示することにより，それに付随する自身の行動を促す語用論的な意味を伴うため，決意の意味で用いられる。(35)においてデ↑では「やる」という話し手の判断が発話時に成立したことを明示し，そのような状況において自身が取るべき行動（やること）を推論させることによって自身に対して行動を促す。そのため，決意のデ↑には自分自身に言い聞かせるニュアンスが伴う。これに対し，デ↓では自身が行くという事態が発話時に既定のものとなったことを明示する。この性質上，デ↓を用いる場合には決意した行動がすぐに行われる場合が多い。

5．疑問文における「デ」

疑問文における「デ」は疑問詞疑問文でのみ現れ，(36)のような真偽疑問文では使用できない。また，動詞述語文，形容詞述語文では「のだ」文でしか使用できず，非「のだ」文では使用できない。名詞述語文では(37)のように名詞に直接接続する。音調についてはデ↓のみが現れ，デ↑は現れない。疑問詞疑問文におけるデ↓は女性性を有し，ある程度親しみを込めて用いられる。男性的，ぞんざいな表現としては「ナラ」あるいはその転訛形の「ナー」がある。また，疑問文においてはデ↓が長音化することが多いが，長音化しなくても不自然ではない。

(36) コノホン　ヨム｛*デー↓／*ナー／*ナラ／φ｝？
（この本，読む？）
(37)（当番の仕事が行われていないのを見て）キョーダレガ　トーバン｛デー↓／ナー／ナラ／*φ｝？
（今日は誰が当番だよ？）

疑問詞疑問文において，デ↓は(38)のようなただ単に不明な情報を問う補充疑問文では使用できない。デ↓が現れるのは(37)(39)(40)のように話し手，あるいは社会一般にとって好ましくない状況に限られる。これに伴い，デ↓には非難の意味が含意される。非難の表示を意図する文脈においてはデ↓あるいは「ナ」「ナラ」を使用しない文ではやや不自然なものとなる。(39)のように，話し手が当該の情報（ここでは何をしているか）を認識している場合においても使用できる。また(40)のように，好ましくない状況は聞き手以外によるものでもよい。この場合は聞き手以外の人物を非難する意味が含意される。

(38) イマ　ナンション｛*デー↓／*ナー／*ナラ／φ｝？（今何をしているの？）
(39) ナンション｛デー↓／ナー／ナラ／*φ｝。ソネーナコトシチャー　オエマーガ。（何をしているのだ？そんなことをしてはいけないだろうが。）
(40) A：ガッコーデ　アシ　オセー　イワレタ。
（学校で足が遅いって言われた。）
B：デーガ　ソネナコト　ユータン｛デー↓／ナー／ナラ／*φ｝。
（誰がそんなことを言ったのだ？）

反対に，デ↓の使用が随意的であるものの例として(41)(42)を挙げる。(41)は主に幼児に対し，話し手が文句を言いながら世話をするような場合の例である。

また，(42) はおかしな髪型をしている聞き手に対して話し手が驚きや呆れを表示する，あるいは頭を怪我している聞き手を見た話し手が心配している場合の例である。いずれも話し手や社会一般にとって好ましくない事態ではあるものの，(37)(39)(40) よりも話し手にとって許容されうる。以上のことから，デ↓の使用が義務的なものであるか否かは，話し手の当該事態への許容度による。話し手にとって当該事態への許容度が低ければデ↓の使用が強制され，許容度が高ければデ↓の使用が随意的となると言える。

(41) アーアー　ドシタン｛デー↓／ナー／ナラ／φ｝？
ソネーニ　ヨゴレテ。
（あーあーどうしたの？そんなに汚れて。）

(42) オマエ　ドシタン｛デー↓／ナー／ナラ／φ｝？
ソノ　アタマー。
（お前，どうしたんだ？その頭は。）

疑問詞疑問文におけるデ↓は女性が親しみを込めて用いる形式であり，より男性的でぞんざいな形式としては「ナ」がある。蓮沼（1997）は問いかけにおける共通語「よ」の意味を「聞き手に通常の理解力・判断能力が欠落していることに対する話し手の不満の表明と正しい認識形成の要請」とする。しかし，(42) で聞き手を心配する場合があるように，岡山市方言のデ↓は不満の意味を必ずしも含意しない。平叙文におけるデ↓と同様，話し手にとって望ましい状況と話し手が置かれている環境が乖離しているために，語用論的に否定的評価を伴いやすいものであると考えられる。

6．勧誘文における「デ」

勧誘形ではデ↑は使用できないが，「デ」の上昇／非上昇とは異なる2つの音調が存在する。具体的にはデ↓と，デ↓が長音化して2拍目で下降する「デー↓」がある。勧誘文においては，デ↓とデー↓では動詞のアクセントが異なる。(43)(44) に例を示す。各例の a は「デ」を伴わない文，b はデ↓を伴う文，c はデー↓を伴う文の例である。岡山市方言において，動詞の勧誘形単独では上昇調をとるが，デ↓が接続する場合には通常アクセントとは異なり，動詞勧誘形の -2拍目で下降する。一方，デー↓が接続する場合は動詞では下降せず，デー↓の2拍目で下降する。これは (45) のように否定勧誘を表す「マー」に接続する場合についても同様である。デ↓では「マー」の1拍目で下降し，デー↓ではデー↓の2拍目で下降する。これらの音調の異なりは「デ」に限らず，「ヤ」においても現れ，使い分けについても同様の意味の相違が見られる。

(43) a ソロソロ　イコ [ー。
b ソロソロ　｛イ [コ] ーデ／イ [コ] ーヤ。｝
c ソロソロ　｛イ [コーデ] ー／　イ [コーヤ] ー｝。
（そろそろ行こうよ。）

(44) a イッショニ　ハシロ [ー。
b イッショニ　｛ハ [シロ] ーデ／ハ [シロ] ーヤ｝。
c イッショニ　｛ハ [シローデ] ー／ハ [シローヤ] ー｝。
（一緒に走ろうよ。）

(45)a アシタ　ガッコー　イクマ [ー。
b アシタ　ガッコー　｛イ [クマ] ーデ／イ [クマ] ーヤ｝。
c アシタ　ガッコー　｛イ [クマーデ] ー／イ [クマーヤ] ー｝。（明日は学校に行くまいよ）。
（[ピッチの上昇位置，] ピッチの下降位置。以下同様。）

(43) ～ (45) の b のように，デ↓ではデ↓を伴わない (43) ～ (45) の a よりも強く当該行為が要求される。先に述べたように，デ↓は聞き手の心的操作を強制する機能がある。デ↓によって，話し手が勧誘しているという事態を聞き手が認識することが強いられるため，デ↓が使用されない場合よりも聞き手に対する行為要求が強く表されると考えられる。

(43) ～ (45) の c のようなデー↓はデ↓よりもさらに強く当該行為を要求する。このデー↓は話し手の求める行為をなかなか聞き手が行わない場合や当然そうすべき状況であるのに聞き手がその行為を実行しないなど，話し手にとって好ましくない状況において，話し手の判断を明示し，それに沿った行動を行わせようと働きかけるものである。デ↓が否定的評価を伴わず，単純に行動を促すのに対し，デー↓は文脈の性質上，不満や非難といった否定的評価を伴う。勧誘文におけるデー↓は下降調のデ↓がもつ機能を強めるものであり，聞き手に対する心的操作をより強くするために用いられると言える。

また，これらの「デ」は (46) のように話し手が参加しない行為を促す場合にも勧誘形に接続できる。これは聞き手が話し手や社会一般にとって望ましくない状況にある場合に現れ，聞き手に望ましい行為の実行を促す表現となる。デ↓とデー↓の意味の異なりは先の勧誘文と同様にデー↓がデ↓よりも強く心的操作を働きかけるものである。ただし文脈の性質上，デ↓も好ましくない状況である場合に使用され，不満の意味を含意しうる。

(46) a サキニ　カンガエテカラ　コ [ードーショー。
b サキニ　カンガエテカラ　コ [ードーショ] ーデ。
c サキニ　カンガエテカラ　コ [ードーショーデ] ー↓。（先に考えてから行動しようよ。）

このような長音化することによる下降調のデ↓の意味の強調は共通語のくだけた表現における「よ」においても確認される。(47)c は子供が駄々をこねる場合などで聞かれる例である。共通語「よ」においても「デ」と同様に a<b<c の順に行為を求める度合いが高い。長音化による意味の対立において，共通語「よ」と岡山市方言「デ」は相違しないと言える。ただし，「デ」では長音化する場合としない場合で動詞のアクセントが異なるが，共通語の「よ」では動詞のアクセントが変わらない点では岡山市方言と異なる。

(47) a 遊園地に行 [こ] う。
b 遊園地に行 [こ] うよ。
c 遊園地に行 [こ] う [よ] う。

７．考察

７．１．共通語の「よ」との相違

以上，岡山市方言における「デ」の用法を見て来たように，「デ」は何らかの認識上のギャップの存在を表示し，そうした状況における心的操作の発動を表すものであった。またイントネーションがもたらす意味の相違についても，上昇調では心的操作を強制し，下降調ではなげかけるというものであった。これらは先行研究に示される共通語の「よ」の特徴に沿うものである。このように基本的意味においては共通語の「よ」と共通するが，それぞれの用法を見ると異なる点がみられた。

まず，「デ」がコピュラを伴わない点が挙げられる。「デ」はコピュラを伴わない性質上，「のだ」文につく場合には「ンデ」の形をとり，形式的に「のだ」の中に組み込まれる。このことが影響しているのかは定かではないが，「デ」は「のだ」文の機能と密接に結びつく。「デ」は命令形や禁止形に接続しないが，「スルンデ」（しろ【命令】），「センノデ」（するな【禁止】）のように，「のだ」文と結びつくことによって命令・禁止の意味を表すことができる。そのため，命令形や禁止形に直接接続する必要がないと言える。勧誘も聞き手への行為を促す表現であるが，勧誘を表す際には勧誘形に接続する。これは「のだ」文の機能としては勧誘を表すことができないため，勧誘を表す場合には「デ」が勧誘形に接続する必要があったものと考えられる。

また，「デ」は「よ」よりもギャップの表示に関する制限が強い点も特徴的である。関係づけの対人的な「のだ」文において，「よ」は単純な事情の説明においても，聞き手にとって未知の情報であるという認識上のギャップを表示するために使用できる。一方，「のだ」文における「デ」はそのような単純な事情の説明では使用できず，「デ」が示す事態とその後に示す情報の間にあるギャップを強調する際に用いられる。基本的な性質であるギャップの表示が，共通語の「よ」よりも限定的に使用されていると言える。

また，独話において用いることができ，話し手の認識を非対話的に表しうる点においても「よ」とは異なる。白川（1992）が「よ」には「本来的には「聞き手めあて」でない文を「聞き手めあて」にする」機能があるとするように，「よ」には対話的な機能がある。しかし，独話における「デ」は発見や決意などで単純な独り言として現れる。心的操作を話し手自身に働きかけはするものの，あたかも誰かに向かって言うような「聞き手めあて」の文とはならない。共通語の「よ」とは異なり聞き手意識は必須ではなく，話し手自身を含めた聞き手に心的操作を働きかけることに意識が向けられていると考えられる。

７．２．岡山市方言の終助詞「ワ」との相違

岡山市方言において「デ」と同様の文脈で現れうる他の終助詞「ワ」との相違から，「デ」の意味・機能について考察する。「ワ」を取りたてて扱う理由としては，「デ」と同様に共通語の「よ」が使用される文脈において現れ，平叙文で使用されるためである。「ヤ」も「よ」に相当するが，使用される文タイプが命令文，禁止文，勧誘文に限られ，聞き手への行動要求を表すことが一見してわかる。そのため，比較しても得られる情報が少ないことが予想される。

先に示した「デ」と「ワ」との文法上の相違は「ワ」は勧誘文や疑問詞疑問文，「のだ」文では使用できず，認識のモダリティでは「らしい」以外とは共起しない，また上昇調をとらないといった点が挙げられる。これらの相違による使い分けは明示的に分かるため，文法上の相違以外で，「デ」と「ワ」の使用に差がある例を以下に示す。

(48)（独話において）ア　アメ　フッテキタ
{* デ↑／* デ↓／ワ}。　あ，雨が降ってきたよ。）
(49) a A：オメー　リョーリ　デキタッケ？
（お前，料理できたっけ？）

B：デキル ｛ワ／*デ↑／*デ↓｝。ナニ　ヨーンナー。（できるよ。何をいっているんだ。）

(49) b B：オー　デキル ｛*ワ／デ↑／*デ↓｝。ドネーシタ？（うん，できるよ。どうした？）

まず，(48) のような独話において，「デ」は使用できず，「ワ」が用いられる。ここでは雨が降り出したことに気付いたことを述べており，(34) にみられた「発見」と類似の表現である。それにも関わらず，「デ」が使用できないのは，それぞれの例におけるギャップの性質によるものと考えられる。(48) におけるギャップとは，「雨が降っている」ことへの認識上のギャップである。翻って (34) の例を考えてみると，「ワカッタ ｛デ↑／デ↓｝」という表現も，発話時の「わかった」状態とそうでない状態との認識上のギャップを表示している。しかし，「わかった」状態になるまでにはわかろうとするプロセスがある。(35) の「決意」の場面でも同様のことが言え，独話における「ヤル ｛デ↑／デ↓｝」という表現には，やらなければならないと思っていた状況から実際にやろうと思うまでには時間的な隔たりがある。これらの時間的な隔たりがもたらすギャップは，単なる未知―既知という認識上のギャップに留まらない。「よ」の基本義としては認識上のギャップの表示であるが，「デ」は驚きや喜び，覚悟といった話し手の心理的な状態の変容も伴った認識上のギャップを表すと捉えることができる。(28) ～ (30) や (32) でも，驚きをもってとらえさせるという心的操作は確認されており，聞き手にとって未知の情報を提示する際に「デ」がもつ機能であると考えられる。

また，(49)a は真偽疑問文への応答で聞き手に抗議する場合である。このような場合，「デ」ではなく「ワ」を用いる。(49)b のように，抗議の意味を伴わない場合には「ワ」は使用できず，デ↑が用いられる。(49)b は聞き手に心的操作をなげかけ，行動を促す（ここでは話し手は料理ができるという情報を知ってどうするつもりなのかを問う）ものである。ここで「ワ」が使用できないのは，共通語の「よ」において心的操作をなげかける機能をもつ上昇調を「ワ」がとることができないことによると考えられる。では，聞き手が事実を誤認しており，認識上のギャップが存在する (49)a においてデ↓ではなく「ワ」が使用されるのはなぜか。(49)a と (49)b では，(49)a において，当該情報の「当然さ」を表示している点が異なる。このことから，デ↓は促す行為については当然さを表示しうるが，提示する情報そのものについての当然さは表示し得ないことがわかる。

以上，岡山市方言において同じく共通語の「よ」に相当する形式である「ワ」との使い分けをみることで，岡山市方言における「デ」の機能をより詳細に検討した。

７．３．大阪方言における「デ」との対照

最後に，大阪方言における「デ」と対照することで，岡山市方言の「デ」の特徴を明らかにする。野間（2011）は，大阪方言における「デ」と「ワ」を対照し，それぞれの意味・用法を記述している。以下，野間の記述から大阪方言の「デ」の特徴を整理する。なお，野間は「デ」のとるイントネーションには言及していないため，これについては対照できない。

まず，形式的な特徴としては，動詞述語文，形容詞述語文，名詞（形容動詞）述語文すべてで使用できるようであり名詞（形容動詞）述語文ではコピュラ「ヤ」を介するようである。また，使用可能な文タイプは平叙文だけであり，疑問文，勧誘文，命令文では使用できないようである。

また，野間は基本的な意味を「当該命題の内容が話し手にとって「自明」のことであり」，「それは聞き手が認識するべきものである」ことを表す形式であるとする。「聞き手が認識するべきもの」について，「その発話によって聞き手が思いこみを正したり，何らかのアクションをとったりさせるという内容」とされていることから，これは心的操作の発動を表すものであると解釈できる。この点においては，岡山市方言と大阪方言は共通の基本的意味を持っていると言える。

しかし，岡山市方言では当該命題の内容は必ずしも話し手にとって「自明」である必要はない。岡山市方言の「デ」は独話において「発見」を表す意味で用いられる場合，当該の命題内容が話し手の中に定着した時点と発話時は非常に近く，「自明」のこととは言えない。また話し手にとって当該命題の内容が不明である疑問文でも使用できる。

また，野間は大阪方言の「デ」を「聞き手目当て専用の文末詞」であるとし，「聞き手を意識した独り言」などの派生的な用法を除き，独り言では使えないとする。一方，岡山市方言の「デ」は「発見」や「決意」を表す場合に現れるように，聞き手を意識せずとも独話で用いることができる。７．２．で述べたように，岡山市方言の「デ」には聞き手にとって未知の情報を提示する際，驚きや喜び，覚悟といった話し手の心理的な状態の変容も伴った認識上のギャップを表す用法がある。「デ」の使用については，大阪方言では聞き手の存在を重視し，岡山市方言では認識上のギャップの表示を重視すると言える。

また，野間は (50)a，(51)a などの例から，デは聞き

手からの反応を前提とし，「聞き手に寄り添う」が，ワは一方的に伝えようとしているだけであり「聞き手から離れる」という違いがあるとする。しかし，岡山市方言ではこれらの違いを (50)b でデ↑を用い，(51)b でデ↓を用いるように，「デ」のイントネーションによって表し分ける。

(50) a 大丈夫？何やったら，もうあとは俺がやっとく｛デ／*ワ｝。休憩したら？　（野間2011，pp.44）

(50) b ダイジョーブ？ナンジャッタラ　モー　アトワ　オレガ　ヤットク｛デ↑／*デ↓｝。キューケースレバ？
（大丈夫？何だったら，もうあとは俺がやっとくよ。休憩したら？）

(51) a ほな，あとは俺がやっとく｛*デ／ワ｝。
もう休憩し。（野間2011，pp.44）

(51) b ジャー　アトワ　オレガ　ヤットク｛*デ↑／デ↓｝。モー　キューケーセー。
（じゃあ後は俺がやっておくよ。もう休憩しろ。）

以上，岡山市方言と大阪方言とを対照し，相違を示した。これらのことをまとめると，岡山市方言における「デ」は形式的にはコピュラを介さず接続する点，勧誘文においても接続できる点において異なる。また，用法については以下の点で大阪方言とは異なる。

・話し手にとって自明のことでなくとも表せる。
・認識上のギャップの表示を重視する。
・聞き手からの反応を前提としない。

これらは７．１．で示した共通語の「よ」との対照でも相違点として現れており，岡山市方言における「デ」の特徴であると言える。

【引用文献】

井上優（1997）「「もしもし，切符を落とされましたよ」―終助詞「よ」を使うことの意味」『月刊言語』第26巻第2号，62-67

大曽美恵子（1986）「誤用分析1 「今日はいいてんきですね。」―「はい，そうです。」」『日本語学』第5巻第9号，91-94

大曽美恵子（1991）「「でしょう」「よ」とイントネーション」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第1号，40-50

白川博之（1992）「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』第77号，36-48

陳常好（1987）「終助詞―話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞―」『日本語学』第6巻第10号，93-109

蓮沼昭子 (1996)「終助詞「よ」の談話機能」上田功他編『言語探究の領域　小泉保博士古稀記念論文集』，383-395，大学書林

蓮沼昭子 (1997)「「終助詞「よ」の談話機能 (2)」『日本語教育論文集―小出詞子先生退職記念―』編集委員会編『日本語教育論文集―小出詞子先生退職記念―』，581-599，凡人社

藤原与一（1976）『昭和日本語の方言　第3巻　瀬戸内海三要地方言―兵庫県淡路島畑方言・岡山県真鍋島本浦方言・山口県祝島方言―』，三弥井書店

藤原与一（1977）『昭和日本語の方言　第4巻　中国山陽道三要地方言―山口県旧通村方言・広島県旧八幡村方言・岡山県旧二川村方言―』，三弥井書店

野田春美（1997）『日本語研究叢書9 「（の）だ」の機能』，くろしお出版

野間純平（2011）「大阪方言の文末詞デとワ」『阪大言語学研究ノート』第9号，30-45

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』，くろしお出版

室山敏昭（1966）「岡山県美作地方方言の文末詞について」『生活語研究』第1号，127-145

森山卓郎（1997）「「独り言」をめぐって―思考の言語と伝達の言語―」川端義明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』173-188，ひつじ書房

（主任指導教員　小西いずみ）